

城下町松江研究の現状と課題

西島太郎

はじめに

雲藩とは雲州藩、すなわち松江藩のことである。江戸時代、藩主松平氏の知行地を儒者たちは「雲藩」と称し、その後、明治二〜四年の間、同地に「松江藩」が置かれた¹⁾。そのため、現在では一般に「松江藩」を使う。

小泉八雲が「神々の国の首都」と呼んだ島根県松江に城と城下町を創ろうとしたのは、一六〇〇年の関ヶ原の戦いで東軍に属し、恩賞として出雲・隠岐二四万石を徳川家康から与えられ、遠州浜松から雲州富田へ移ってきた堀尾氏であった。しかし戦国大名尼子氏がかつて居城とした富田城では、兵農分離後の城と城下町としてはそぐわないとして、出雲国内に新たな城地を探し、その結果松江を新たな城地と定めた。

堀尾氏は忠氏・忠晴二代にわたり、三三三年間（一六〇〇〜三三三年）出雲・隠岐両国を統治した。堀尾氏断絶後、京極忠高が両国を領し、石見銀山までも幕府から預かった。当初、堀尾氏と同じ二四万石であったが、幕府の公式記録である『徳川実紀』や京極家の系図²⁾には、二六万四二〇〇石とある。これに石見銀山を含む仁摩・邑智両郡四万石を幕府から預かったのである。忠高の統治は、一六三四年から三七七年のわずか三年余りであつ

た。その後、松平氏が一〇代、二二三三年の間（一六三八〜一八七一年）、出雲国一八万六〇〇〇石を治めた³⁾。これに幕府からの預かり地として隠岐国一八〇〇〇石があつた。このように、堀尾・京極・松平三氏のうち最大の藩主が京極氏であつた。

これまで松江といえは、明治に至るまでの二二三三年を治めた松平氏ばかりが採りあげられ、松江藩の藩主は松平家と多くの人々が認識していた。しかしここ数年で、堀尾氏に対する研究が深まった。それは松江城築城を開始した一六〇七年から数えて四〇〇年目を迎えるに当たり、松江市が二〇〇七年から五年にわたり松江開府四〇〇年祭を催したことがきっかけであつた。その最終年度には、江戸時代の松江藩に特化した博物館である松江歴史館の開館も決まり、松江城を築城した堀尾氏や、城下町についての人々の関心は高まっていた。

しかし、解決しなければならない課題は多かつた。初代藩主は誰か、松江城の築城や城下町造成の過程、堀尾氏と松平氏の間には挟まれた京極氏の業績、藩主松平氏歴代についてなど、松江藩についての基礎的な事項から解決しなければならなかつた。「戦災に遭わず、造成当時から掘割や街並みを残す松江城下」と一般に言われるにもかかわらず、その内実については明らかでなく、後述する松尾寿氏や和田嘉宥氏の研究を除き、本格的な

検証が試みられることはなかった。

私は、博物館開館に向け、これらの課題に応えなければならなかった。そのため私が行ったのは、まず過去の研究を把握し、何がどこまで明らかとなっていて、何が課題として残されているかを明確にすることであった。というのも、松江の城下町研究においては、個々の研究がバラバラになされ、研究の積み重ねによる共通認識が形成されていない。研究の到達点を知らないで、次の研究には向かうことができない。

本稿は、このような問題意識に基づき執筆したもので、城下町松江の研究史をまとめ、その到達点と課題を明確にし、一、二の知見を加えることで、今後の城下町松江研究の方向性を探ることを目的とする。

第一章 城下町松江の研究史

1 一九六〇年代まで

松江城とその城下町が本格的に研究の素材として扱われるようになったのは、史料に基づいて叙述が試みられた一九三〇年刊行の『島根県史』⁽⁴⁾が最初である。原始古代から現代に到る島根県の歴史叙述の試みは、出雲・石見・隠岐という旧三國を一県として捉えるためには必要なことであった。しかしそれは島根県の歴史の輪郭というべきものであった。一九四一年に刊行された『松江市誌』⁽⁵⁾は、上野富太郎・野津静一郎両氏の編纂による一七五〇頁にわたる大冊で、一冊まるごと江戸時代の松江藩について叙述されている。できるだけ史料を掲載し叙述しており、これを越える松江藩研究はいまだ存在していない。松江藩政について知るための基本文献である。しかし、編纂で使用された原本の多くは、現在確認できず、叙述の妥

当性を検証できなくなっている点に課題を残す。

第二次世界大戦後、松江城天守修復が行われ、その報告書『重要文化財松江城天守修理工事報告書』⁽⁶⁾が一九五五年に刊行された。松江城については、一九六一年に妹尾豊三郎氏が『松江開府物語』⁽⁷⁾を、同年に日本城郭協会が『松江城とその周辺』⁽⁸⁾を刊行した。他にも、慶長一六年の天守棟札の存在を指摘した城戸久「松江城天守」(一九六六年)⁽⁹⁾など断続的に関心は持たれていた。その集大成が一九六七年に刊行された河井忠親氏の『松江城』⁽¹⁰⁾である。堀尾氏の富田城からの移転、天守の築城、城下の建設といった点について、トータルに叙述している。翌年刊行の『新修島根県史』⁽¹¹⁾は、旧来から言われていたことを踏襲した内容となっている。

このように松江城の城郭に注目が集まるなかで、城下町への関心は、歴史地理学の立場から一九五八年に発表された矢守一彦「近世城下町プランの発展類型——序説」⁽¹²⁾が最初である。矢守氏は松江の城下町について、「堀尾氏の建設期は惣構え型」であり、その後の松平氏入部後の絵図から判断すると、「その外に、さらには大橋川をこえた白潟方面一体が町屋化されている」とする。惣構え型(惣構型)とは、外郭が城下町全体を圍繞し、侍屋敷と町屋が近接あるいは混在する城下町の型である。それが松平期になると、惣構え(外郭)の外の白潟が町屋化したと見るのである。矢守氏が内町外町型と分類する型で、惣構え型から内町外町型へと発達の過程をみる一事例として示した。この点は矢守氏が一九七一年に発表した「城下町プランの諸類型——小浜・松江・松本——」⁽¹³⁾でより明確に示されている。矢守氏は、「雲陽大教録」と正保図(国立公文書館蔵「出雲国松江城絵図」)を基に、「大橋川以北では総構えの観を呈する」とし、「堀尾・京極氏時代までは、ほぼ総郭型だったともいえ、結局、松江は総郭型↓内町・外町型

の発達をたどった」と評価する。その上で「重要なのは、その(B)型(総郭型―西島注)時代に」城下の郭内に町屋を排除した侍屋敷のみとする「(D)型(郭内専土型―西島注)的に整備する意図がうち出され、外濠のほか、諸水系を土・庶居住区の画定に巧みに利用している点であろう。そしてまた松平氏にとつても(D)型(郭内専土型―西島注)プランは、すでに松本城下町において経験済みのものであった」とする¹⁴⁾。

この矢守氏の評価は、堀尾期の松江城下図の存在が明らかでなく、かつ京極期も橋北部分のみの現代の地割に基づいた絵図しかない段階での評価である。中世以来の白潟の町場の存在を考慮に入れておらず、その後の堀尾期の城下町図の出現と検討(後述)により、矢守氏の評価は変わらざるを得なくなる。

矢守氏に続き城下町松江について着目したのが、石倉春子氏が一九六三年に発表した「松江城下の都市計画」¹⁵⁾である。島根大学教育学部卒業論文要旨ということもあり、短文で松平期の城下町の特徴を捉えようとした論考である。同年には松本豊寿氏が、城下町が大きくなり侍町が拡大すると生じる町屋の分岐展開について、団塊状町屋から「新規の町屋が分出発達し町屋相互は互いに分離する」事例として、松江(米子町・石橋町)を採りあげた。同様の事例は、常陸水戸、因幡鳥取、阿波徳島等、中藩級に多く見られる特徴であるという¹⁶⁾。

2 一九七〇年代

一九七〇年代に入り、伝説や物語といった世界ではなく、城郭図、城下町図などの基本史料へ関心が向けられた。松江市教育委員会からの依頼を受け、松江城郭図や城下図の現状調査を行った島田成矩氏がまとめた「松

江城の城郭復元と史料」(一九七〇年)、「松江城城下図」(一九七一年)、「松江城の城郭図について」(一九七一年)、「松江城の城郭について」(一九七五年)、「松江城城下図と城下町(一)〜(三)」(一九七六〜七八年)は、松江城の城郭図、城下町図を網羅的に集め、分析の対象にした成果である¹⁷⁾。松江藩を抱え大工竹内家に伝わる、一七世紀頃成立の「竹内右兵衛書付」を基に、天守ほか城郭内の寸法や位置などを分析し、城郭図については細微にわたる事実が明らかになった。しかし、城下図については江戸時代に描かれた古代からの松江の地形を考察するものの、絵図の所在確認という側面が強く、絵図の内容にまで立ち入った検討はなされなかった。これらの研究成果は、松江城の城郭を中心に同氏著『松江城物語』(一九八五年)¹⁸⁾にまとめられた。

島田氏の研究とは別に、西和夫氏は「松江城天守」(一九七八年)¹⁹⁾において、松江城天守の三階以上の部材に修理を示す墨書が多いことから、「一・二階とは違って三階以上には相当な改変が加えられていることが推測される」と、早い段階から松江城上層部の改変に触れている点も見逃せない。

松江城下を古代からの地形のなかで捉えようとする試みとして、一九七九年に発表された池田善昭氏の「松江平野における居住立地の展開と水問題(一)——治水をめぐる問題と城下町形成——」²⁰⁾は、風土記の時代から明治にいたる松江地域と水の関係を『松江市誌』付図から読み解こうとした最初の研究である。古代から現代までと扱う年代幅が大きく、概略とあってよい内容であるが、治水の問題とからめて松江城下を読み解こうとした点で先駆的である。この論考が画期的だったのは、水系の改修と埋め立てによる城下町形成は「治水のための要件にあえて逆行したもの」であ

り、そこに松江城下における「今日の水問題の淵源」を見出した点である。松江の地の根本的条件を指摘した点で重要である。しかし、淵源の指摘だけでは「今日の水問題」の解決には至らないであろう。城下町形成から今日までどのような解決方法が模索されたのかを詳細に明らかにし、なにかが解決され、解決されなかったのか、十分認識しておく必要がある。

3 一九八〇～九〇年代

一九八〇年代、松江市による城郭整備がすすめられ『史跡松江城保存修理事業報告書』(一九八三・八五・八六年)²¹が提出されるなか、一九八二年に城下町松江について明らかにした初めての本格的な研究が現れた。松尾寿氏による「松江」²²である。これは、島根大学が一九八〇年に東京の古地図店から購入した「堀尾期松江城下町絵図」を検討したもので、城下町松江の都市構造を、その成立期にさかのぼって解明した点で重要である。四年後、『城下町松江を歩くI』(一九八六年)²³としてさらに詳細に城下町の分析が試みられた。これまで堀尾期の城下町絵図は知られておらず、この絵図の発見により漸く、城下町成立期からの松江を比較検討する素地が生まれた。松尾氏は次のようにまとめる²⁴。

この「堀尾時代松江城下町絵図」(「堀尾期松江城下町絵図」のこと—西島注)が知られる以前は、松江城下町は堀尾期には未完成で、京極氏や松平氏の手で逐次に充実・修補・拡大され、一八世紀以降に完成したといわれてきたが、この絵図の出現によって、松江城下町がすでに堀尾期に完成していたことがはっきりした、とまとめる。しかし松尾氏の研究にも限界がある。それは「堀尾期松江城下町絵図」に描かれている情報が、そのまま当時の実態を反映したものと見た点にある。後に、この絵図が都市計画図である

ことが明らかになるとともに、実態部分と計画部分を峻別した分析が必要となってくる(後述)。

松尾氏の研究に呼応するかの様にして、一九八八年から一九九五年にかけて和田嘉宥氏の「城下町松江の研究」が発表される。関連の報告も含め一二編の論考²⁵は、日本建築学会の研究報告集や学会講演梗概集に報告されたもので、一篇くは短編ながら城下町松江の各地区の街区や住人構成にまで触れた本格的な研究である。松平期である江戸時代中期から明治期を対象とする。一八七二年(明治五)に明治政府は田畑の永代売買を認め、翌年地租改正条例を公布、松江でも地価を調べる土地台帳「沽券大帳」²⁶が作成された。和田氏は「沽券大帳」の検討から、松江城下では、士卒階級の屋敷である貫属屋敷より町屋敷の土地の利用価値が高く、地価が高い事実を指摘した²⁷。さらに、城下武士の屋敷替を管理していた藩の屋敷方が作成した「松江城下武家屋敷明細帳」²⁸を分析することで、武家屋敷の屋敷替が基本的に同格同職間で行われていたこと、格式に応じた屋敷の大きさや居住地が存在していたことなどを明らかにした²⁹。

また町人町(町人地)についても、先の「沽券大帳」と同時期に作成された地籍図「松江街二分間図」³⁰を基に、その特徴を抽出した。町人町のなかでも、商人町の中核は本町・天神町・八軒屋町であり、職人町は灘町・寺町・和多見町であることを指摘した。さらに一八四二年(天保一三)の触書から、松江城下の町人が、①町年寄など特権的町人、②表通りに住み、借家居住でも別に屋敷を持つ町人、③屋敷を持たない借家住居の借家人、④路地裏の借家に居住の借家人の四階級に区分され、借家人は袴着用を許されず、家持と厳然と区分されていたことを明らかにした。その居住形態は、表通りと裏通りで異なり、借家は基本的に裏通りに形成されたこ

とを、屋敷数に対する「竊数」の比較検討から明らかにした。間口が狭く奥行きが深い町屋形式の主屋は、居宅(持家)と借家(貸家)に大別され、天神町には町人の町屋敷が、寺町には長屋形式の住居が多く、便所や井戸が共同の「裏かしや」の存在も指摘している。そして松江における町屋の基準間口は二間、二間半、三間であり、借家に比べ居宅が一回り大きいとする³⁵。この様に、城下の武家町と町人町の特徴を、屋敷割や住人構成のあり方にまで踏み込んで分析を行ったのは、和田氏が最初であり、今後深められなければならない視点である。

一九九〇年代においても、『史跡松江城発掘調査報告書(二ノ丸番所跡)』(一九九三年)、『史跡松江城公園周辺整備事業実施報告書』(一九九六年)、『石垣調査報告書 史跡松江城』(一九九六年)など、松江城の城郭に関する報告書が松江市から出され、その総括として、『史跡松江城整備事業報告書』第一分冊事業概要、第二分冊調査編、第三分冊石垣修理、第四分冊建造物復元、第五分冊環境整備(二〇〇一年)がまとめられた³²。松江城に関して、これが現在のところ最もまとまった報告書である。その後も、石垣に関して『史跡松江城石垣修理報告書』(二〇〇七年)が刊行されている³³。

4 二〇〇〇年代

二〇〇〇年代に入ると、絵図に注目した企画が相次いだ。二〇〇四年に松江郷土館・島根県立博物館・島根県立図書館の三会場で共同開催された「絵図でたどる島根の歴史」展は、島根県に関わる絵図を一同に集めた初の絵図の多様な可能性を示す企画であった³⁴。同年、「堀尾期松江城下町絵図」の複製・頒布も行われ³⁵、堀尾期の城下町松江を身近に知ることが

できるようになった。翌二〇〇六年一月には、島根大学附属図書館が「島根大学附属図書館貴重資料展 絵図の世界——出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図——」を開催し、記念講演や「堀尾期松江城下町絵図」のトレース図を付録として収録した図録『絵図の世界』³⁶が刊行された。この講演記録には、松尾寿氏の「堀尾期の松江城下町」や林正久氏の「松江平野の地形とその形成過程」が含まれており、それまでの研究の到達点が示されている。

「堀尾期松江城下町絵図」については、二〇〇七年に高安克己氏により、放射性炭素年代からも堀尾期のものでよいことが科学的に裏付けられた³⁷。これを受けて、二〇〇八年に水田義一氏は「計画図としての城下町絵図」³⁸を発表し、松江が成立期の状況を色濃く残す計画都市であることを明確にした。これにより、描かれた当時の実態部分と計画部分を峻別した上での絵図読解が求められるようになった。

堀尾期への関心は、二〇〇七年から五年をかけ松江市が開催した「開府四〇〇年祭」によるところが大きい。月山富田から松江へ拠点を移した堀尾氏に、人々の関心がようやく向けられる様になってきた。二〇〇八年三月には、佐々木倫朗氏が『堀尾吉晴と忠氏』³⁹を著し、それまで堀尾吉晴が初代藩主と考えられていたが、堀尾氏が出雲へ入封した時点では、既に吉晴の子忠氏が家督を継いでいた可能性が高いことを指摘し、吉晴を「松江開府の祖」、忠氏を「初代藩主」と位置づけた。翌年には堀尾吉晴の旧城である遠州浜松城、出雲富田城、松江城と堀尾氏の城普請の特徴から松江城や城下の特徴を捉えようとした山根正明氏の『堀尾吉晴 松江城への道——浜松、富田、松江、城普請の軌跡——』⁴⁰も刊行され、城郭史という新しい視点らの研究が現れた。同じ年、新聞「山陰中央新報」が連載企画

した「開府四〇〇年続松江藩の時代」に、西島が寄稿した「築城物語」⁴¹と「丘陵だった宇賀山」⁴²は、これまで信じられ、通説となっていた松江城の築城や城下町造成の過程に、根拠がないことを明らかにした。この頃西島は、松江歴史館の基本展示室に入った正面にある、六分間の映像「計画都市(城下町) 松江の形成」製作を担当していた。開府以前の松江がどのようなものであり、堀尾父子の床几山での城地選定、五年で湿地帯を埋めて城下町が完成してゆく様子を、実写とCGを駆使して描いた。このストーリー作成から完成まで携わるなかで、これまで言われていたことに根拠があるのかを、確定しなければならなかった。この映像自体は、松江に伝わる物語として見ざるを得ないが、松江の城下町形成を初めて視覚化したという点で意味があると考えている。

一方、二〇〇八年に作野広和・堀江智史両氏は、近年、技術開発が進んだ地理情報システム(GIS)を利用し、江戸時代の町絵図と現代の土地区画とを重ね合わせ変化を観察した。その結果、道路の拡幅や歩道の設置、裏借家密集地の変貌など、小規模な空間構造の変化しか見られず、「江戸時代に規定された城下町の空間構造を色濃く残し現代に至っている」のが今日の松江の姿であるとした⁴³。翌年、船杉力修氏は文部科学省科学研究費報告書⁴⁴で、先に作野氏が分析対象とした松江市所蔵の町絵図八枚のトレース図や文字の翻刻を行った。これにより町人町の構造を解明する格好の史料が公にされた。和田嘉宥氏の研究段階では知られていなかったこれらの絵図の分析は、今後の課題である。その分析を通じ、町人町の多くの事が明らかになるものと思われる。

考古学方面からも、二〇〇七年に松江市鹿島歴史民俗資料館で「松江城下を掘る」と題した特別展が開催され、図録『松江城下を掘る』⁴⁵と共に、

松江城下の発掘に伴う考古学的成果が公開された。また二〇〇八・〇九両年にわたり、松江歴史館建設に伴い発掘された乙部・朝日両家老屋敷跡からは、家老屋敷の構造や三度にわたる盛土などが判明した。地方都市における近世考古学の成果として注目され、その成果は松江歴史館の展示や展示図録⁴⁶に生かされ、報告書『松江城下町遺跡(殿町二八七番地・殿町二七九番地)』(二〇一一年)⁴⁷にまとめられた。

都市空間という視点からは、宮本雅明氏が一九九四年に発表した「城下町の空間類型」⁴⁸が重要である。ここでは、かつて矢守氏が分類した城下町類型の一つである内町外町型は、戦国期における大名直属の商工業者居住域と在地の市町とが分離していた「二元的構造を投影した城下町のみ」であり、これにより近世城下町の空間類型は、総郭型と町郭外型の二類型に集約され、前者から後者への展開序列がみられるとする。また町人地は、城に対して横の町筋を基軸となる町割であるヨコ町型(横町型)の町割と、城に対して縦の町筋が町割の基軸となるタテ町型(縦町型)があり、ヨコ町型(横町型)の町割は立地により序列の生じない町割であり、関ヶ原の戦直後から一般的となるとする。

宮本氏が城下町としての松江をどのように認識していたかは、二〇〇〇年刊行の『朝日百科日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅』五、城と城下町の「近世主要城下町一覽」⁴⁹において示される。松江の城下町は、平面類型としては、全体プランが「町郭外型B」⁵⁰で、町地プランが「横町複列型」⁵¹としている。堀と土塁による囲郭が、町人地を含む城下町全体を囲う「総郭型」⁵²に対し、武家地の囲う都市壁の外に町があるのが「町郭外型」⁵³の都市プランである。そのうち、郭外に武家地も置く場合が「町郭外型A」⁵⁴、郭外に町屋敷と足軽屋敷のみとする場合が「町郭外型B」⁵⁵と分類する。「総郭型」

が公権力形成期の城下町に多いのに対し、「町郭外型」は城下町の基本形とする。町地プランの「横町複列型」というのは、城に対して横の町筋が主軸となる「横町型」で、かつ町地に通りが複数並行する場合をいう。ここから見出されるのは、松江の城下町は、公権力確立後の一般的城下町のあり方を示している。

松江の城下町を「町郭外型B」と評価した宮本氏は、一〇年後、松江の城下町の細分化を試みるなかでその評価を変える。二〇一〇年三月にまとめられた『城下町金沢学術研究1』⁵⁰では、松江の城下町プランを、従来の「町郭外型」ではなく「総郭型」と評価を変えている。その理由は、武家地の中に町人地（米子町や母衣町北側の町屋）があることに気づいたことによると推察される。武家地プランの類型を、「町介入型」と評価している点からも明らかである。武家地は、公権力形成期には侍屋敷だけの「侍一体型」の城下町が多いが、公権力確立期には、武家地に町が入りこむ「町介入型」が増加し、慶長後期に形成された城下町には卓越するという。町人地と区分する「侍一体型」が求心性を志向するのに対し、「町介入型」は「武家地に対する町人地の均等なサービス機能提供を重視し、町人地に達成された社会と空間の均質性を志向する」空間類型だと、宮本氏は指摘する。また、宮本氏は、松江城の主要御殿を二ノ丸御殿とし、寛永六年に主な機能が二ノ丸御殿から三ノ丸御殿へ移ると一覽に記しているが、その根拠は確認できなかった。

都市空間を決定する都市計画の側面からは、一九九〇年代から西日本の城下町をフィールドに高見徹志氏は、見通して三点以上の直線上にある視軸と、ヴィスタ（見通し）、曲尺を用いた「 α 三角形六〇間のモジュール」（六〇間を基準とする直角三角形）の三つに基づいて城下町が設計された

のではないかとの仮説を検証しつづけていた。高見氏は、二〇〇二年の「松江城下町の設計技法」や二〇〇三年の「松江城下町の縄張」で松江の城下町の場合を検証し、二〇〇八年にそれまでの成果を著作『近世城下町の設計技法』にまとめた⁵¹。高見氏の仮説が論証されたか否かは、現在の私は判断できない。高見氏によれば、松江の場合、「朝日山―平浜八番宮を結ぶ冬至旭日―夏至落日のラインと月山富田城―茶白山―天守―佐太社を結ぶラインがクロスする位置に天守が配置された」とする。また城下の寺社の配置は、「 α 三角形六〇間のモジュール」の距離になるという。冬至旭日―夏至落日のラインに生産霊・地霊が鎮座する瑞祥思想を見て、別の信仰地のラインと組み合わせる見方は、数多くある選択肢を都合よく選び取っているようにも見える。より精度の高い地図で、「 α 三角形六〇間のモジュール」に基づく寺社との距離は正しく反映されるのか。自分なりに検証したうえで判断すべきであろう。

5 二〇一〇年代

開府四〇〇年祭を機に堀尾期の松江に関心が深まるなか、二〇一〇年二月に西島は『京極忠高の出雲・松江』を刊行した⁵²。堀尾・松平両氏の間であり、三年余りの出雲・隠岐を支配した京極氏については、松江ではその存在すら忘れ去られていた。わずか三年余りで潰えた京極忠高期の松江を松江藩政の中に位置付け、全体像を提示した。その核となるのは、西島が香川県の丸亀市立資料館に見出した、京極期の松江城下町絵図の分析である。それまで松江では、松江城下を流れる大橋川より北の、橋北部分のみの京極期松江城下町絵図が知られており『松江市誌』の付録などでも採りあげられていた。しかし、その絵図は、明らかに近代の町割に基づいた

ものであり、どこまで信頼してよいか不明であった。松江城下全域を記した京極期の城下町絵図が発見されたことで、堀尾、京極、松平期の城下町絵図が揃い、相互に比較検討できる状況が生まれた。それまでの信頼できる松江の城下町全図は、堀尾、松平期のものしか存在しなかったため、堀尾期から松平期への変化が、京極期になされたものか、松平期になされたものかをはっきりと示すことができなかった。京極図の発見により、堀尾・京極・松平各期の城下町の変遷を明らかにすることができるようになった。

『京極忠高の出雲・松江』では、単に絵図の比較による城下町形成を辿るだけでなく、藩主京極忠高の志向性という観点ら変化の要因を説明している。端的にまとめるならば、藩主京極忠高は堀尾・松平氏より多い石高と領域の支配者として、積極的に領内の治水に努め、斐伊川・伯太川の大手(若狭土手)造成に着手し、松江城下についても天神川の南に武家地を創りだそうとしたことや、城下の堀を埋めるなど改変志向を持っていた。しかし、わずか三年の治世であったためにこれらは中断する。忠高の志向を受け継ぎ、入国後一気に成し遂げていくのが、新たな藩主松平直政だった。その意味で、京極期の松江藩政が、その後の松平期の藩政の基礎となっていると評価した。

また翌二〇一一年に西島は、京極期の松江城下町図や分限帳(給帳)の諸本について、その特徴と限界を明らかにし、底本となるべき絵図と分限帳を確定した論考「京極期松江城下町図と分限帳——諸本の比較検討——」⁵³⁾を発表した。そこでは、底本となる国立公文書館本分限帳の翻刻と丸亀本松江城下町絵図記載の人名や居住地、石高などを分限帳と対比させることで、京極期の城下町松江を禄高別に居住域の違いを提示した。

二〇一一年三月に開館した松江歴史館の基本展示室には、一六〇〇年か

ら現代まで一〇〇年毎の松江城下の絵図や航空写真を並べることで、いかに造成当時の姿がそのまま残されているかを知ってもらう展示「計画都市(城下町)松江の形成」がある。一六〇〇年代は島根大学附属図書館所蔵の「堀尾期松江城下町絵図」のレプリカを展示している。そのレプリカ製作を担当した西島は、実物とレプリカとを突き合わせて色を合わせる色校正を行った際、斜め横から一方向で蛍光灯を当てた時にヘラでなぞった線を見つけた。よく見ると、絵図全てにヘラでなぞった線があった。なぜ角筆の凹線があるのか。この点を考察し、絵図の制作工程と伝来を明らかにしたのが、西島「堀尾期松江城下町絵図」の制作工程と伝来——角筆の使用痕にみる——(二〇一一年四月)⁵⁴⁾である。角筆の存在から、堀尾図が堀尾家所持の原本であり、「城附」の公文書として、京極・松平各氏へと受け継がれたものであることを明らかにした。

この他、城下町造成期について、二〇一〇年一〇月に開かれたシンポジウム「都市「松江」と「石見銀山」で仁木宏氏は、町郭外型である松江の城下町について、大名権力が中世以来の町(白瀉・末次)に手を付けることができず、武家地だけを堀で囲い「武家側が身をかたくしている」と指摘した⁵⁵⁾。町人を「無防備な堀の外に「放り出した」のではなく、「町人の世界を大事に維持し」た点に、松江に城下町を造成した大名権力である堀尾氏と、中世以来の町場に住む町人との関係を見出している。

堀尾・京極・松平各期の城下町図の比較から初期の城下の変遷が解明されるなか、二〇一一年から翌年にかけて、中期から後期にかけての城下の変化を明らかにしようとする研究が現れた。松本博・安高尚毅両氏による①「城下町図と山陰商工便覧から見た近世後期の松江の空間——松江城下町の基礎的考察——」(二〇一一年三月)、②「松江城下町図の編年——松

江城下町の基礎的考察2——」、③「近世松江の成立と空間形成 藩政前期——松江城下町の基礎的考察3——」、④「近世松江における都市空間の展開 藩政後期——松江城下町の基礎的考察4——」(②③④共、二〇一二年三月)である⁶⁶。

①は、「近世後期の松江の町並を把握できる資料」として、明治二〇年に刊行された『山陰道商工便覧』をあげ、そこに描かれた松江の商家の銅版画をもとに近世後期の松江の町並を復元している。しかし、松江歴史館基本展示で幕末の渡海場の風景(松江大橋付近)を、一〇〇分の一で再現するために開かれた検討会では、『山陰道商工便覧』の描き方は、屋根のあり方が構造上ありえない長さで続いており、また両隅が特有の形となる出雲特有の来待石製の棟石ではない軒端瓦を据えているため、明らかに松江の現実の姿を忠実に描いていてのではない、と判断された。『山陰道商工便覧』の編集・出版は大坂府堺の川崎源太郎で、画家は不明である⁶⁷。そのため編集人川崎氏または絵師は、現地を見ずに製作しているのではないかと、との疑念から、あくまでも参考とする立場をとった。そのそも、明治維新以降の激変を経た明治二〇年刊行の銅版画を、そのまま「近世後期」の松江の状況を示すものとして考察すること自体、正確さを欠いており、史料批判のない考察が危ういことを示している。

②では、新たに発見された絵図等の作成年代を推定する。ただし、根拠とする史料批判が甘い点に課題を残す⁶⁸。これを受けて、江戸時代を通じた松江の城下町の変遷を③④で展開する。とくに③では、内山下の範囲を殿町と母衣町であることを確定した。この点は、松尾寿氏も別の資料から明らかにしている⁶⁹。松本・安高両氏はさらに内山下の範囲を、角櫓二階造の場所から殿町と中原の堺の花畑の西の堀までと想定する⁷⁰。続いて松

江の城下町プランを、宮本雅明氏の二〇〇〇年段階の見解を引用して「町郭外型」とする。そして堀尾・京極図では母衣町の北端に町人地があることから、「戦国の二元的構造を投射した構成」と見て、「京極期までは中世の名残を残していた」と評価し、松平期に一元的構造の「町郭外型」へ変わるという。「戦国の二元的構造」とは、戦国期に特有の大名直属の商業業者の居住域と在地の市町とが分離していた状態を言う。しかし、母衣町の北端の町人地が、大名直属地の居住者であるか不明な状態で、二元的構造と評価するのは拙速と思われる。また二年前に宮本氏が松江の城下町プランを、「町郭外型」から「総郭型」へと評価を変えたことを考慮すべきである。松江の城下町が、公権力確立期の武家地に町人地が入り込む「町介入型」で、武家地へ町人地からのサービス機能提供を目的するものであると見る方が、論理的にも、実状からいっても整合性がある。そのため、堀尾・京極両期を「中世の名残を残していた」とする評価は、当たらないと考える。「中世の名残」ではなく、近世初頭の社会状況に見合った城下町プランが、松江の城下町だったのである。

③では、都市空間の形成を、堀が水路化する状況や、宍道湖岸の石垣整備、藩政施設の設置が元禄初期に一旦終了すること、武家地・町人地の拡張、寺町の変化など、構成要素ごとに時期の相違はあるものの、その変遷を跡付け、城下町の整備が元禄後期から延享期(一八世紀前々中期)に完了したと評価した。ただ、元禄期に城下町整備が終わるのが、藩政の「バブル崩壊」によるとする藩財政との関連の指摘は、「バブル」という現代的表現とともに、「バブル」的な状況が本当にあったのかの検証抜きに語られており、史料の根拠の提示が求められる。④では、近世後期の松江城下の都市空間の展開を跡付ける。新田開発に伴う水路の開発、藩政施設の継続

的设置、武家地・町人地共に拡張がみられ、城下町の最盛期を一九世紀中ごろから幕末までとする。

二〇一〇年代に入り、城下町図に基づく城下の変遷をトータルに描こうとする動きが見られる一方、個別のテーマも深化した。まず松江城天守については、西和夫・山田由香里・中島綾乃・川村摩理の四氏による「昭和解体修理工事資料に基づく松江城天守の再検討」が二〇一二年三月に発表され⁶¹、これまで検討されることなかった昭和二五〜三〇年になされた松江城天守の解体修理工事で作成された資料を分析し、修理以前の天守の構造を、二階分の長さをもつ通し柱が松江城天守の特徴であり、包板をもつ柱を寄木柱と呼ぶのは誤りであることや、地階から二階と、三階から五階の様々な違いを指摘し、「建築背景の違い」を想定するなど、一九七八年の西氏の見解を裏付ける。また同じ月に『松江城研究』第一号⁶²が刊行され、前年一一月に行われた松江城研究報告会「松江城研究の最前線」での報告、山根正明「松江城研究の最前線」、山上雅弘「松江城の縄張りについて」、和田嘉宥「松江城天守と城郭施設について」、松尾信裕「松江城下町遺跡の遺構と町割り」が収録された。同誌には、松江藩大工頭の竹内家が、松江城天守や武家住宅の状況を記録した『竹内右兵衛書つけ』も、初めて全文活字化し収録する。同じ二〇一二年には、かつて城戸久氏の報告以来、所在不明となっていた松江城創建時と目される慶長一六年正月銘の祈禱札が、松江神社から再発見された。銘文から、天守が同一五年末までに完成していた可能性や、祈禱に大山寺が関わっていたことが明らかになり、現在、松江市で分析が進められている。

既存の視角だけでなく、新たな視角に基づく研究も生まれている。一つは、二〇一二年三月に発表された徳岡隆夫・高安克己・大矢幸雄三氏によ

る論考「絵図と測量図に見る大橋川の歴史」で、城下を流れ隣接する大橋川の歴史の変遷を跡付けた⁶³。この論考は、城下周辺の開発（新田開発）の様相というだけでなく、水害対策という視角をとっている点で注目され、流路の直線化や拡張といった指摘は、城下町だけでは松江を語ることでできないことを示している。

また城下町松江の前提となる歴史的条件・背景を、中世にまで遡らせて考察した長谷川博史氏による『中世水運と松江』⁶⁴が、二〇一三年一月に刊行された。古代からあった「内水面の日常的交流・物流」が中世に「日本海を介した遠隔地交流」へ変化し、日常化により拠点の港湾都市が生まれ、その一つが末次・白潟という町場であり、物流・交通の要衝としての町場末次・白潟の存在が城下町形成の前提であると指摘する。その上で、松江の城下町建設は、島根半島中央部の水陸の要衝を確実に把握するためであり、商業発展優先でない、軍事防備体制優先による水路・陸路の管理統制である点を指摘した点も、松江という場所の性格を考える提言として重要である。

最も新しい研究は、二〇一三年三月に発表された渡辺理恵・大矢幸雄両氏による「松江城及城下古図」の特徴とその表現内容⁶⁵である。旧家老家である三谷家所蔵の「松江城及城下古図」を分析したもので、同図を、現存する松平期作成の絵図のなかで最古の藩用図とする。また絵図制作後、現用期間が約七〇年あったことや、城下の植生や施設、末次湖岸の石垣等、絵図の描写から城下の景観を復元している。絵図の制作年次を比定するだけでなく、絵図の利用のされ方にまで注目した点で新しい。

6 小括

以上、二〇一三年三月までの城下町松江の研究史を整理してきた。研究の着眼点は次の六つになる。

- ① 都市空間類型
- ② 城下町図の収集と編年
- ③ 松江城
- ④ 城下町の成立と変遷
- ⑤ 武家地と町人地（主に絵図、考古学の視点から）
- ⑥ 松江の特質を開府以前や周辺から探る

①は、矢守一彦・宮本雅明両氏に代表される一九五〇年代からの研究で、全国的な視野から城下町の類型を試みているが、評価に変遷がある。②は、島田成矩氏の城下町図の網羅的収集が始まる一九七〇年代からの研究である。③は、戦後すぐに行われた松江城天守修復以降、城内の史跡保存に関わり行われた考古学・建築学的視点からの研究である。④は、堀尾期松江城下町絵図を分析した松尾寿氏の一九八〇年代からの研究である。⑤は和田嘉宥氏の一九八〇年代の研究から始まり、歴史地理学的視点から町絵図の活字化や、城下の発掘調査による考古学的視点から研究がすすんだ。⑥は、池田善昭氏や林正久氏の地質学からの視点や、長谷川博史氏の近世以前の中世史側からの視点、徳岡・高安・大矢三氏による城下周辺を見る視点など、空間的にも時間的にも広がりをもつ一九七〇年代末からの研究である。

研究方法は主に絵図分析が中心で、地理学的アプローチや発掘調査をもとにした考古学の成果も見られ、松江城に関しては建築学によるアプローチがみられる。文献史学からのアプローチは総じて少ない。絵図そのもの

の情報を読み取る作業の継続も必要であるが、城と城下に関連する古文書等の基礎史料の調査が求められよう。文献史料のうち、和田嘉宥氏が見出した「松江城下武家屋敷明細帳」は、屋敷の変遷を年月日に到るまで記したものであり、この史料の活字化は、今後の松江の武家地研究を行う上で必須の作業となる。この史料の利用により武家地居住者の特徴が明らかとなるはずである。また、町人地の状況が詳細にわかる「町絵図」八枚の分析も重要で、活字化されていることもあり検討が俟たれる。松江の町人地における文献史料の収集と、活字化など利用しやすい環境を整えることも求められる。先行研究からは、松江城下に住む武士や町人・商人など、そこに生活する人々の実態が見えてこない。城下の発掘調査による人々の生活の一端を明らかにするだけでなく、文献史料からそこに生活した人々まで活字することができてはじめて、城下町松江の実像が時代的・空間的にも豊かなものとなると考えられる。

第二章 城下町図の制作年をめぐって

1 制作年次比定方法の問題点

松江城下町の姿を知るための基本資料である城下町図は、松江市史編纂の調査により、二〇一三年三月段階で写しを含め九三鋪が確認された⁶⁶。この絵図の制作年代を確定するにあたり、これまでは次の方法を取っていた。

まず、寛文六年（一六六四）に再興された外中原の月照寺や、元禄二年（一六八九）に寺町から母衣町へ移転した普門院、同院南に開削された堀など、城下の主要寺社や公的施設の存在期間で大きく年代を絞る。次に、

城下の屋敷地に記された藩士の人名に注目し、藩士各家の初代から明治維新までの歴代当主の勤功を記した松江藩が編纂した「列士録」と照会する。「列士録」に記載された当主の在職期間や没年、官途・仮名・通称などから制作年代を絞り込み、これを複数人繰り返すことで年代幅をさらに絞り込んでいく。

この方法により、ある程度時期を絞ることは可能である。しかし、先行研究での「列士録」の利用方法は、この史料がもつ限界を弁えないで利用しており、問題がある。一例として、松本博・安高尚毅「松江城下町図の編年」⁶⁷⁾で採りあげられた「松江城及城下古図(仮称)」の場合をみよう。

この論考では、「松江城及城下古図(仮称)」を元禄二頃〜五年(一六八九―九二)に制作されたとする。その考証方法は、同図が記載する「柳多主計」は、「列士録」では三代目「柳田主計近式」のみであるから、柳田近式の初見から没年に年代は絞られるとする。しかし、前近代の人名は、仮名・通称をいくつも変えるのを通常とする。また仮名・通称はその家の歴代が代々継承する場合が多いことは、よく知られたことである。「列士録」の場合、その人物の最後の通称・仮名・官途が記されたにすぎないことは、「列士録」を丁寧に読み込むと理解できる。そのため、「主計」が三代目柳田近式のみであるとの断定から、年代を確定することはできない。「主計」を、近式の前後の歴代が名乗った可能性は、排除できないためである。

「松江城及城下古図(仮称)」はその後、渡辺理恵・大矢幸雄両氏が絵図の名称を「松江城及城下古図」として、その制作年を天和三〜元禄五年(一六八三―九二)に絞り込んだ⁶⁸⁾。その方法は、「列士録」に見える「柳田主計」が家督を継ぎ家老となつてから没年までの年代を決め手としており、松本博・安高尚毅両氏と同様の問題を抱えている。

つまり「列士録」に載る人名から制作年代を絞ることは容易でなく、年代の決め手とすることはできないのである。では、より確実な制作年代を割り出す方法はないのであろうか。それは、これまで絵図の年代比定では使われたことのない、「松江城下武家屋敷明細帳」を活用することである。

2 「松江城下武家屋敷明細帳」の活用

——「松江城及城下古図」の制作年——

「松江城下武家屋敷明細帳」は、貞享頃(一六八四―八八)〜明治初めまでの武家地について、屋敷地ごとの広さ・向き・所有者(居住者)の変遷を記した、藩の屋敷方で記録・保存された帳簿である⁶⁹⁾。和田嘉宥氏による先駆的な研究があるが、その後、活用されていない。試みに、松本・安高両氏があげる「柳田主計」「今村平馬」「熊谷主殿」を、「松江城下武家屋敷明細帳」で確認すると次のようになる。

「柳多主計」の中屋敷は、元禄二年(一六八九)七月二十四日に内中原にあつた屋敷(松江城下武家屋敷明細帳「レ二四」)を去り、同月に殿町の屋敷(松江城下武家屋敷明細帳「ル八三」)へと移った。殿町の屋敷の旧住人である村松将監は二月二日に転居しているので、数日内のことと考えられる。同地で「主計」が死去し、新たに「木工」が家督を継ぎ、その後、改号し「弾正」と名乗り、その後に父の名の「主計」に改めた(「父ノ名改号」)。彼はさらに祖父の名「四郎兵衛」に改め(「祖父ノ名改号」)、死去した。家督は「左太郎」が継ぎ、「弾正」と改めた後、さらに「主計」と改号し、最後は「四郎兵衛」に改号した。このように、改号の時期は記さないが、歴代が家の通称である「主計」や「四郎兵衛」を名乗っている。ここから絵図の制作年は、柳田家が殿町の屋敷へ転居してきた、元禄二年二月

二二日以降であることが確実となる。

次に「今村主馬」は、殿町の屋敷（松江城下武家屋敷明細帳「八一三」）に元禄九年五月二二日に転居し、一時、塾居の後、名を「平馬」に改め死去した。家督は「主鈴」が継ぎ、改号し「平馬」、さらに「美織」と名乗り、その後隠居して家督を「主馬」に譲った。「主馬」も死去した後、「八十八」が家督を継ぎ、「八十八」は「平馬」・「美織」と名を改めた。この様に、今村家も代々「主馬」を名乗る。ここから、さらに絵図の制作年は、「今村主馬」が殿町に転居してきた、元禄九年（一六九六）五月二二日以降に絞ることができる。

また「熊谷主殿」は殿町の屋敷（松江城下武家屋敷明細帳「ホ二三」）へ、同地を今村主馬が去った元禄九年五月二二日以降に移り住んでおり、当初は「熊谷斎」が居住した。斎はその後「主殿」と改号する。その後、享保四年（一七一九）七月五日に新たに「小田切佐富」が同地へ転居してくるので、その直前に「主殿」は他へ転居したことがわかる。「小田切佐富」が同地へ転居してくる享保四年七月五日以前が、絵図制作年の下限ということになる。

この三家の屋敷地の変遷から「松江城及城下古図」の制作年は、今村・熊谷が殿町に住んだ元禄九年（一六九六）五月二二日以降、享保四年（一七一九）七月五日までの間に絞ることができ、従来、比定されていた年代より少し下る。

「列士録」に居住地は記されておらず、「列士録」に載る人名が、絵図に記された人名と一致したからといって、その人物が絵図の場所に住んでいたかは判らないのである。そのため、その家の歴代が名乗る通称・仮名を根拠に時期を特定することはできない。確実なのは、絵図に描かれた場所

に住んだ期間から、絵図の制作年を絞り込む方法である。

3 鳥取県立図書館所蔵「松江城下絵図」の制作年

次に、松本博・安高尚毅両氏の検討では、元禄二二（一六九九）一七〇二とされた⁷⁰、鳥取県立図書館所蔵「松江城下絵図」（縦一〇八・〇×横一三七・〇cm。彩色）の制作年を、「松江城下武家屋敷明細帳」を使って絞り込んでみる。検討は、殿町・母衣町の人名について行った。本図の殿町に「石原右門」とある石原家は、「石原吉五郎」が殿町の本丸下の堀端の屋敷（松江城下武家屋敷明細帳「ル八〇」）から、同じ殿町の南部（松江城下武家屋敷明細帳「ロ六」）へ元禄一五年九月二七日に移った。同地で「吉五郎」は父の名の「九左エ門」に改号し死去した。家督を継いだ「長四郎」は、その後「右門」と改号し、さらに「要人」と改号し死去した。その後家督を「十三郎」が継ぎ、「字門」と改号し、元文四年五月一六日に屋敷替を藩から命ぜられ同地を去る。ここから、絵図の制作年は、元禄一五年（一七〇二）九月二七日から元文四年（一七三九）五月一六日の間に絞ることができる。

同じ殿町（松江城下武家屋敷明細帳「ホ二三」）に「山口七郎右エ門」家が住んだのは、元禄一三年一月二二日から享保一三年（一七二八）三月一六日の屋敷替までなので、絵図の制作年の下限は、さらに享保一三年三月一六日以前に絞られる。

「乙部新之丞」の家が殿町（松江城下武家屋敷明細帳「ヌ七四」）に住んだのは不明であるが、享保四年（一七一九）七月五日に他所へ移っている⁷¹ので、さらにこれ以前に絵図の制作年を絞ることができる。

「乙部新之丞」の隣の「河崎善四郎」が同地へ移るのが、宝永四年（一

七〇七) 九月二九日で、その後「六郎左エ門」、さらに「養助」と改号し、享保一八年(一七三三) 五月一日に屋敷替となる。そのため絵図の制作年の上限は、宝永四年(一七〇七) 九月二九日以降となる。

母衣町(「松江城下武家屋敷明細帳」又七二)の「氏家一学」の家が同地に住んだのは、元禄二年二月二九日からで、「一学」の後、家督を「右膳」が継ぎ、その後「右膳」は「一学」と改号し、正徳四年(一七一四) 一月一三日に他所へ移っている。ここから絵図の制作年は、正徳四年(一七一四) 一月一三日以前となる。

「氏家一学」の西隣(「松江城下武家屋敷明細帳」又七二)の「高木佐五左エ門」は、宝永五年(一七〇八) 一〇月二日に内中原(「松江城下武家屋敷明細帳」ワ八) から移り、正徳二年(一七二二) 三月一六日までいた。そのため絵図の制作年は、宝永五年一〇月二日から正徳二年三月一六日の間に絞られる。

「杉原彦三郎」が母衣町(「松江城下武家屋敷明細帳」ト三二)に住んだのは、宝永七年(一七一〇) 二月九日から正徳三年三月一六日までなので、絵図の制作年の上限は、宝永七年(一七一〇) 二月九日以降となる。

「大西中庵」が母衣町(「松江城下武家屋敷明細帳」へ二八)に住んだのは正徳二年(一七二二) 三月以降で、「忠庵」死去後、家督を「三伯」が継ぎ、のち「春庵」と改号し、享保一八年(一七三三) 一月一八日に屋敷替となった。ここから絵図の制作年は正徳二年(一七二二) 三月以降となる。

以上、殿町・母衣町記載の人名から、居住時期が重なるのは、「高木佐五左エ門」の下限である正徳二年(一七二二) 三月一六日と、「大西忠庵」の上限である正徳二年(一七二二) 三月以降となる。このことから、本図の制作年は、正徳二年(一七二二) 三月だと考えられる。

4 写された城下絵図の留意点

——黒澤家所蔵「松江城下絵図」の制作年と現用期間——

次に松平初期の藩用図で、絵図を活用する際に留意すべき点を知らせてくれる、黒澤家所蔵「松江城下絵図」を検討する。黒澤家所蔵「松江城下絵図」は、旧松江藩土黒澤家が所蔵する資料のなかにあり、現在、松江歴史館に寄託されている。縦五九・五×横八三・五cmの彩色図で、橋北部分のみを記す。本図は彩色の状況から近代の写と推定される。

大幅な年代枠は、「長寿寺」の記載から求められる。奥谷に記載されている「長寿寺」は、堀尾期に瑞応寺(現在の堂形町の天倫寺境内の位置にあった)内の小庵、長寿庵が、寛永一八年(一六四一)に奥谷に移り長寿寺と寺名を改め、さらに元文二年(一七三七)に萬寿寺と寺名を改めた⁷⁾。これより、寛永一八〜元文二年の間に絞られる。

次に「松江城下武家屋敷明細帳」の記載から絞り込むと次の様になる。
「安間(甚左エ門)」が母衣町(「松江城下武家屋敷明細帳」チ三六)に住んだのは、正徳三年(一七二三) 四月一九日から享保八年(一七二三) 三月二三日までである。

「桜井市右エ門」が母衣町(「松江城下武家屋敷明細帳」ト三二)に住んだのは、正徳三年(一七二三) 三月一六日からで、「市右エ門」はその後「久左エ門」、「刑部」と改号し、享保一〇年(一七二五) 八月二八日に屋敷替となる。鳥取県立図書館所蔵「松江城下絵図」には、同じ場所に、「桜井市右エ門」の前の住人「杉原彦三郎」が記されているので、鳥取県立図書館所蔵「松江城下絵図」の制作よりほんの少し遅れることがわかる。

この二例から、絵図の制作年は、正徳三年(一七二三) 三月一六日から享保八年(一七二三) 三月二三日までの間に求められそうであるが、この

期間に収まらない人名も記載されている。例えば、「大石十太夫」が母衣町（「松江城下武家屋敷明細帳」千五一）に住んだのは、元禄十一年（一六九八）八月一〇日から元禄十四年二月二日までであり、「榊左仲」が殿町（松江城下武家屋敷明細帳「ヌ七五」）に住んだのが元禄九年一月一日から元禄十三年九月一日までである。正徳三（享保八年より二〇年近く遡る）人名が、なぜ記載されているのか。この点は、この絵図が写しである事を考慮すべきである。渡辺理恵・大矢幸雄両氏は、三谷家所蔵「松江城及城下古図」が制作後も、人名を記した貼紙を貼り継ぐことで、約七〇年も使われ続けたことを指摘している。黒澤家所蔵「松江城下絵図」の原図も同様の使われ方をしたのではないだろうか。

つまり元禄一一～一三年の間に黒澤家所蔵「松江城下絵図」は制作され、その後、貼紙を貼り継ぐことで少なくとも約二〇年間は現用期間があった。その絵図を上から写し取ったのが、現在見ることでできる写なのではないかと考えられるのである。松本博・安高尚毅両氏は、「絵図作製時における当主の名が常に絵図に反映されているわけではない」とする。これは「列士録」による人名比定から導き出された見解であるので、正確に反映されないであろうことは理解できる。絵図を制作する側に立つてみれば、制作時の居住者（もしくは所有者）を記するのが最も自然な行為であろう。制作時の居住者（もしくは所有者）でない人名を記す場合、別の意図を想定しなければならぬが、今のところ別の意図を想定すべき要因はない。とするならば、絵図の原図には、制作時の居住者（もしくは所有者）を記しているのと見るのが素直な読み方ではないだろうか。絵図が原図でなく、写である場合、現用期間を含めた情報が入っている場合もあることを想定し、絵図の制作年を絞り込む必要がある。

以上、本章では、絵図の制作年を探る際、「列士録」記載の人名による絞り込みでは、正確な制作年が絞り込めないことを指摘した。それに代わる方法として、武家地の屋敷地ごとの広さや向き、所有者（居住者）の変遷を記した、藩の屋敷方で記録・保存された帳簿「松江城下武家屋敷明細帳」の記載に基づくことで、正確な制作年を絞り込むことができることを示した。今後は、松平期の城下町図の全てに、この方法で制作年を割り出す作業が必要である。そして「松江城下武家屋敷明細帳」の活字化と分析が早急になすべき課題であり、そのことにより、松平期の城下町松江の変遷と家臣居住地の動態を明らかにできるものと考ええる。

第三章 城下町松江の歴史的段階

1 実戦重視から治水重視へ

これまでの先行研究に基づいて、城下町松江形成の見取り図を描くと次の様にまとめられる。

松江は元来、宍道湖の水が大橋川から中海、日本海へと抜ける喉部にできた砂州で、湿地帯だった。その中心地は、中国大陸の明国にまで知られた「失喇哈町（白潟）」⁷⁶である。白潟の北にある大橋川対岸に末次の砂州があり、ここにも戦国時代に職人集団が居住していた⁷⁷。

堀尾氏は商人の町白潟ではなく、その北の亀田山を城地とし、その山麓に広がる湿地帯の埋め立てにより武士の居住する武家町を完成させた。この地は室町時代、京都の東福寺領であった末次荘（末次・末次郷）があり、末次・中原・黒田・奥谷・菅田の五名があったと言われる⁷⁸。仁木氏の指摘⁷⁹にあるように、堀尾氏は中世以来の町（白潟・末次）に手を付けず、

武家地だけを堀で囲った。丁字路、鉤型路を設け、深く幅の広い堀とする、実践を想定した城と城下町が造られた。ただし武家地は堀で囲う(総郭型)が、米子町や母衣町北側の町屋に見られる様に、武家地に町を入り込ませた(町介入型)。それは町人地を介入させることで、町人が担える機能を武家地全体に提供するためで、慶長後期の公権力確立期に多くみられる城下町の形態であった⁷⁷⁾。

堀尾氏(二代忠晴期)は、南からの備えを確実にするために、宍道湖岸の土手を石垣にすることと、足軽たち下級武士を集住させるために、天神川の南に広がる湿地帯に町を創る計画を立てた。しかし実行には移されることはなかった。

堀尾氏二代の後、松江城主となった京極忠高は、機能していない堀を埋め、天神川の南に広がる湿地帯に町を創るために具体的指示を与えた。

三年余の京極治世の後、新たに松江藩主となった松平直政の政策は、京極忠高が行おうとしていた政策を継続し完成させることであつた。それは、足軽・鉄砲衆らを集住させ、城下南部の備えのため創りだした雑賀町^{さいかまち}であり、忠高が始めた日御碕社造営^{ひのみさき}も直政の時に完成した。城下も今の東本町^{ひがしほんまち}にあつた武家屋敷は職人町へと大きく姿を変えた。城下をめぐる堀は、広く深い堀から、狭く浅い堀へと変化した。堀底の凸凹^{なま}を均していることから、防御という点よりも、城下の水の排水という生活面を重視したものに變化する。また、城下で最も重要な京橋川と南田町の堀は石垣で護岸し、湿地帯を埋め立てたことによる脆弱な岸辺を補強した。芋町^{おまち}や茶町、京店などの宍道湖岸は、堀尾忠晴の時に、宍道湖からの攻撃に備えるため石垣を造る計画であつたが、京極期においても果たすことはできなかった⁷⁸⁾。しかし一八世紀初頭には、宍道湖岸は石垣で護岸された⁷⁹⁾。松平期の護岸

は、宍道湖の波による浸食を防ぐための治水に関わる実用面からなされた点に特徴がある。

以上、堀尾氏治世の末期に示された都市計画は、京極氏の取り組み後、松平氏に引き継がれた。この間、城下をめぐる藩の政策は、戦争時の実践を意識したものから治水を意識したものへと變化していったと評価することができる。

2 元禄二年の三つの改変

治水に対する意識が最も明瞭に現れたのは、松江藩松平家三代綱近^{つなぢか}の政策である。一八世紀初頭の綱近治世期には、宍道湖岸が石垣で護岸されていた点が指摘されているが、その他にも治水への取り組みが窺える。

松平綱近の治世期は、従来「国政頹廢の時代」⁸⁰⁾と評価されてきた。しかし綱近は、歴代のなかでも際立って松江に愛着をもった殿様であり、その志向性は藩政や行動に窺うことができる⁸¹⁾。例えば、江戸と松江を往復した参勤交代は、歴代藩主のなかでも七代治郷に次ぐ多さで、二九年間に一五度出雲へ帰国した⁸²⁾。他の藩主は、隠居後、江戸で暮らしたが、彼は眼病で隠居を余儀なくされた後、松江に住むことを決めた。幕府からの預かり地である隠岐を返上し、出雲国のみ限定して領国の統治に腐心し、のちに薬用人参の栽培地となる古志原の開墾や植民、藩窯楽山焼に繋がる陶工の招聘といった殖産興業の基礎を築いたのも彼であつた。彼の政策が、その後、七代治郷(不昧)の治世になり花開き、藩政改革を成功へ導く原動力となつたのである。

この綱近が行つた政策のなかでも注目されるのが、城下町を変える三つの政策である。いずれも元禄二年(一六八九)に行われたと考えられる。

一つ目の政策は、城下と宍道湖を繋げたことである。荒隈堤と呼ばれる橋北の城下南西部分を切り開き、宍道湖から直接水が城下の堀へ入り、その水が東へと流れるようにした。「三谷氏記録」元禄二年一月一日条に「荒隈並に天神橋切貫絵図、御勘定所へ相渡」とある⁸³。荒隈は荒隈山麓にある荒隈堤のことと考えられ、この堤の一部を開削したのである。同時代史料ではないが、文久二年（一八六二）に松江藩儒桃好裕（節山）が編纂した『出雲私史』⁸⁴元禄二年一〇月二一日条には次のように記す。

荒隈堤を中斷して水を行り、新に土橋を作り（蓋し是より中原を分つて二となし、水東を内中原となし、水西を外中原となす）、天神橋西の湖辺数十歩に石を築き、以て水害を防がんことを官に請ふ、之を允す、

幕府へ申請していた二つの事項は、元禄二年一〇月二一日許可がおりた。その内容は、①荒隈堤を切り開き、城下の堀と宍道湖とを繋いだこと、②天神橋の西の宍道湖辺数十歩に石で堤防を造り水害を防ぐ、の二点である。「荒隈堤」は四十間堀の最南端に位置する堤である。ここを切り開いたことで、宍道湖と四十間堀とが繋がった。また中原の地も東西に分断され、城下に近い内中原と荒隈山側の外中原に分かれたという。

右のことは、城下町図からも裏付けられる。堀尾図や京極図、正保図では荒隈堤は土手となっているが、元禄九く享保四年（一六九六—一七一九）の間に制作された「松江城及城下古図」（三谷家蔵）では、荒隈堤の一部が切り開かれ貫通している。また天神橋西に石で堤防を造ったという点も、正徳二年（一七二二）に制作された「松江城下絵図」（鳥取県立図書館所蔵）にはつきりと描かれていて、その状況を確認することができる。

以上から、元禄二年に荒隈堤の一部が貫通したのは事実と考えられる。それまで松江城下の堀水は、宍道湖の出口にある大橋川下流の東側からし

か入ることができず、堀の水流はほとんどなかったものと想定される。城下南西の荒隈堤を開削し、宍道湖の水を城下へ直接入れることにより、堀の水流はよくなったものと考えられる。

開削の理由は、宍道湖の水の出口は大橋川一本しかないため、水の出口を少しでも広くするためであったと考えられる。松江城下に宍道湖の水が流れることにより、大雨の際の水の出口が増えることとなる。もう一つは、先ほど述べたように、城下の堀水に水流をつけるためであろう。水流のない堀水は溜り腐る。水流をつけることで、水が入れ替わり、水の澱みをなくしたものと考えられる。

二つ目の政策は、城下南東から宍道湖の水が入り、堀に水流が生まれることよって、生じた問題である。今の普門院のある場所（松江市北田町）は、母衣町から北へ三角に突き出た場所にある。この突き出た部分は、堀伝いに西から東へ流れる水流を、一旦北東へと方向を変えることとなる。そのため、普門院南側に堀を設け、突き出た土地を島にすることで、西から東へ直線に水がスムーズに流れるようにしたのである。この開削時期であるが、白瀉にあった普門院が、白瀉の大火で現在の場所へ移ってきたのが元禄二年と考えられている⁸⁵。元禄九—享保四年（一六九六—一七一九）間に制作された「松江城及城下古図」を見ると、普門院は北田町にあり、寺前に堀が開削されているので、この絵図制作以前に堀は開削されていた。この堀を宍道湖と城下の堀とを繋げる前に開削する必要性は、現在のところ見いだせない。そのため、普門院の移転に併せ、荒隈堤の開削と同時に堀の開削がなされたと考えるのが自然ではないだろうか⁸⁶。

三つ目の政策は、先に見た天神橋の西の宍道湖辺数十歩に石で堤防を造り、水害を防いだとされる点と関わる。天神川入口を石垣で護岸するだけ

でなく、天神橋の架かる天神川を東西へ直線に引いたことである。網近は宍道湖の水を中海方面へ流す流路を、大橋川と松江城下の堀だけでなく、さらにもう一本削り出した。先の「三谷家記録」にある天神川の「切貫」がそれで、元禄二年一月一日に荒隈堤と天神橋(川)の「切貫絵図」を藩の勘定所へ渡したとあることから判明する。明和年間(一七六四―七一)成立の「雲陽大数録」⁸⁷⁾には、「切貫」に至る詳細が記されている。

一、天神川、今の橋の所より東北に行当り、津田灘へ流る、然るに、
(一六七六)
 延宝二年寅の洪水、松江水下となるに付て、長者原へ家中を移さる
(松江中産の茶白山巻)
 へき由、水学者を召て評義有り、依て此天神川を東南向けて、幅式
 百五十間に立る時は、以来城下の水難を通るゝ、に一決して、先試
 の為に今の新川となれり、

「天神川、今の橋の所より東北に行当り、津田灘へ流る」とは、天神川が天神橋の辺りから、北東へ向かい、津田に面する「津田灘」へと流れていたことを示している。これは、鳥取県立図書館所蔵の「松江城下絵図」にも描かれている。「堀尾期松江城下町絵図」では、天神橋から東に向かうにつれて流路が広がっているが、それは一つの川というより砂州の合間を流れる浅瀬だったのではないだろうか。つまり、天神川は東西へまっすぐ流れるものではなく、東北へと延びていく流路が主だったものと考えられる。これを、一六七六年の洪水をきっかけに、天神川を東西にまっすぐ約四五四メートル(二五〇間)開削することで、湖水の水を放水する計画を立てたものと考えられる。「雲陽大数録」の別の箇所には「一、天神新川、元禄二乙巳製之途未成就」ともあり、元禄二年の新川(天神川)開削は完全ではなかったようである。しかし、元禄二年という年が、城下町松江にとつて大きな節目となっていることは理解できよう⁸⁸⁾。

藩主松平綱近は、元禄二年に宍道湖から真東へと中海に向かって流路(天神川Ⅱ新川)を付けた。宍道湖と城下を繋ぐ荒隈堤を貫通させ、普門院南に堀を造り、天神川を開削することを同時に行つたのである。彼は三一歳、家督を継いで一五年目であった。何度も松江にやってきて、洪水時に浸水する松江城下をいかにして守るか、考えた末の事であったに違いない。ここに竟の住処を松江に決めた、松江城下を守ろうとする藩主綱近の志向性を読み取ることができる。

城下の掘割は、元禄二年の改変により現在みられる形となる。これ以降、大きな改変はなされていない。戦災に遭うこともなく、現在に残る松江城下の掘割は、元禄二年に完成したといえよう。

城下掘割完成後も、大雨時の城下町浸水の被害を解消する水害対策は行われた。それは、宍道湖水を日本海へつなぐ川を、大橋川・天神川のみに負わず、もう一本造ることであった。宍道湖岸の浜佐田(松江市浜佐田町)から島根半島を北上し、日本海側の恵雲(松江市恵雲町)へと抜ける佐陀川の開削である。天明五年(一七八五)に着手し同七年に完成した佐陀川の開削により、宍道湖から真北に向けて川をつくり日本海へ湖水を流すことで、大橋川・天神川に集中する宍道湖水を分散させることとなった。

最後に城下町の形成を、計画されたもの、実行されたものを峻別して段階的に整理し、本章のまとめとする。

1 慶長一二〜一六年(一六〇七―一六一一)の五年間で、堀尾吉晴と忠晴による松江城築城と城下町が造成される。

「実行」 城地にのみ石垣を用い、城下には石垣で護岸した堀はなく、土手だった。城下の堀は、広く深い堀で、四十間堀はその名の通り四十間あった。

2 元和六く寛永一〇年（一六二〇—二三）頃、堀尾忠晴は城下町の改変

計画を、都市計画図「堀尾期松江城下町絵図」で示す。

〔計画〕 今の茶町・芋町の宍道湖岸の石垣護岸や後の雑賀町の整備を計画。

3 寛永一〜一四年（一六三四—三七）頃、京極忠高の城下町改変計画。

忠高が行った斐伊川・伯太川の「若狭土手」造成に見られる様に、一国規模の水利改変を志向するなかで計画された。

〔実行〕 内中原や東本町の堀の埋め立て。

〔計画〕 後の雑賀町の整備を具体的に指示。

4 正保期（一六四四—四八）までに、京極氏の都市計画を松平直

政が継承し実現。

〔実行〕 京橋川と南田町の堀の兩岸を石垣で護岸。東本町の武家屋敷

を町人・職人町へと整備。城下の堀が広く深い堀から狭く浅い堀へと改変し、凸凹だった堀底を均し水の流れを良くする。

それにより四十間堀はその半分の幅となる。

内中原の中堀の北部を開削し、外堀と繋げる。

三の丸を正方形に形を整える。京橋川河口の船入の退化。

雑賀町の整備を、京極期の計画から九〇度回転させた町割り
で実現。

5 元禄二年（一六八九）、藩主松平綱近による宍道湖水放水のため三つの

改変を行う。

〔実行〕 荒隈堤の開削で松江城下へ宍道湖の水を流入させる。

城下の普門院前の土地を堀として開削。天神川を東西にまっ
すぐ開削。

6 天明七年（一七八七）、藩主松平治郷は、清原太兵衛の献策を受け島根

半島を横切る佐陀川を開削し、新たに宍道湖水を日本海へ流
すルートを造る。

〔実行〕 佐陀川の開削。

慶長一二年（一六〇七）の造成開始から元禄二年（一六八九）までの八
二年の間、城下町松江は幾度かの画期と変遷を経て、徐々に形づくられて
いった。「治水のための要件にあえて逆行し」て形成された城下町松江が抱
える問題は、解決への努力を積み重ねることで果たされていった。しかし
宍道湖の水を城下に流入させ、天神川・佐陀川を開削しただけでは、城下
が降雨時に浸水することを完全に無くすことが出来なかったことは、その
後の記録（例えば『出雲私史』等）を見れば明らかである。城下の一等地
にある家老乙部家の上屋敷は、江戸時代を通じ三回、盛土が繰り返され、
合わせて一メートル以上も土が盛られた⁹⁹。城下が浸水した場合を想定し
た人々の対策の一例である。城下に住む人々がどのような対策をとって洪
水に備えていたのかという、人々の生活の知恵を明らかにしていく視点が
求められる。

おわりに

本稿では城下町松江研究の現状と課題を明らかにするため、研究史の整
理からはじめた。研究は大きく、①都市空間類型、②城下町図の収集と編
年、③松江城、④城下町の成立と変遷、⑤武家地と町人地（主に絵図、考
古学の視点から）、⑥松江の特質を開府以前や周辺から探る研究に整理され
た。特に文献からのアプローチが少ない点を指摘した。

次いで城下町の姿を視角的に追うことが可能となる城下町図の制作年を絞り込む方法について、藩士の勤功録である「列士録」に基づくのではなく、藩の屋敷方で記録・保存された帳簿「松江城下武家屋敷明細帳」の記載に基づくべきであることを提言した。また「松江城下武家屋敷明細帳」は、利用しやすい形で活字化されるべき史料であることも述べた。

最後に、これまでの研究成果をまとめ、城下町の造成から一八世紀初頭までに取り組まれた城下改変の動きに、実戦重視から治水重視への政策の変化を読み取った。城下町の外観が一八世紀初頭の松平三代綱近期に固まり、その後は大きな改変がなされていないことから、その後も襲う洪水に人々が、普段の生活のなかでどのような工夫と対策をとっていたのかを明らかにしていく視点が求められることを提言した。

研究史を整理して、最も憂慮したのは、先行研究を踏まえない研究が多く存在することである。研究の蓄積を踏まえないために、明らかにした事実は古い研究段階に接ぎ木することとなり、研究の進展にはつながらない。研究の積み重ねこそ、新たな地平が開くための要件と考える。そのため、本稿では少しでも城下町松江に言及した研究を取りあげ、研究史に位置づけようとした。これからの城下町松江の研究が、先人の研究の積み重ねに基づいて進展することを願い、ひとまず擱筆することとする。

注

- (1) 「雲藩」の語が現れるのは、宝暦十一年(一七六一)に松江藩の儒者宇佐美瀧水(しんすい)(患助)が、萩生徂徠の「四家集」に寄せた序文に見える「雲藩」辺りではなかるるか(佐野正巳『松江藩学芸史の研究』漢学篇、明治書院、一九八一年、八一頁所載の写真参照)。これ以降、藩儒桃家や「雲藩副相」小田切備

中などに「雲藩」の使用例が窺える(明和八年(一七七二)建立海野安重碑の「雲藩侍講桃源蔵」『松江市誌』一六八一頁)、寛政八年(一七九五)刊行「揚子法言増注」の「日本雲藩桃源蔵」『松江藩学芸史の研究』二四二頁写真)、安永三年(一七七四)建立小田切備中寿蔵銘『松江市誌』一六八四頁)。一般に大名領の公称は「領分」「領地」「知行所」等であり、「藩士」は通常、松平家中や松平家家来、「藩主」は雲州侯など領地名に侯を付して呼ばれた。本稿では、現在一般に呼ばれる「松江藩」で統一する。

(2) 「京極御系図」(『新編丸亀市史』4史料編、所収)。

(3) 正確には、堀尾期一六〇〇年一月〜一六三三年九月二〇日の三二年一月か月、京極期一六三四年閏七月六日〜一六三七年二月二二日の三年六か月、松平期一六三八年二月一日〜一八七一年七月一四日の二三三年五か月である。

(4) 『島根県史』七、藩政時代下、(島根県、一九三〇年、のち名著出版から一九七二年に第八巻として復刻)。

(5) 上野富太郎・野津静一郎編『松江市誌』(松江市、一九四一年)。

(6) 『重要文化財松江城天守修理工事報告書』(松江城天守修理事務所、一九五五年)。

(7) 妹尾豊三郎『松江開府物語』(私家版、一九六一年)。

(8) 日本城郭協会編『松江城とその周辺』(日本城郭協会出版部、一九六一年)。

(9) 城戸久「松江城天守」(『仏教芸術』六〇、毎日新聞社、一九六六年)。

(10) 河井忠親『松江城』(山陰文化シリーズ28、松江今井書店、一九六七年)。

(11) 『新修島根県史』通史篇1(島根県、一九六八年)、第四部第一章第二節(築城と城下町の建設)一「松江築城と城下町」(岩成博執筆)。

(12) 矢守一彦「近世城下町プランの発展類型——序説」(『史林』四一—一六、一

九五八年。のち同氏著『都市プランの研究』大明堂、一九七〇年の第2編第1章に収載。

- (13) 矢守一彦「城下町プランの諸類型——小浜・松江・松本——」(『地理』一六一一、古今書院、一九七一年。のち同氏著『都市図の歴史 日本編』講談社、一九七四年、四〇四—四〇九頁に収載。同書では城下町「プランの継起的变化」との小見出しを付ける)。

- (14) その後も矢守氏の見解は同じであり、①「城下町の絵図とプランの見方——中国地方の場合——」(『日本の古地図5城下町』講談社、一九七一年)や②「山陰道諸藩の城下町プラン」(『探訪日本の城7山陰道』小学館、一九七八年)、③『城下町のかたち』(筑摩書房、一九八八年)で再説している。

- (15) 石倉春子「松江城下の都市計画(卒業論文要旨)」(『島根史学』一三、島根大学教育学部史学研究室、一九六三年)。

- (16) 松本豊寿「近世城下町の都市域構造——近世城下町の都市域構造とその変質について(1)」(『歴史地理評論』三五—三三、一九六二年。のち同氏著『城下町の歴史地理学的研究』吉川弘文館、一九六七年、第二部第一章に収載)。
なお近世の城下町松江を直接扱ったものではないが、翌一九六四年に発表された杉本邦太「地方都市松江市」(『山陰文化研究紀要』五、島根大学、一九六四年)は、松江の近代化を、初めて総括的に明らかにしようとした点で注目される。杉本氏は、松江市の地方都市としての性格を、「わずかに県都としての行政面と、卸商業における県下第一の都市としての面目を保っているにすぎない」とする。その理由は、商工業・通勤通学圏の後背地が限られたものであり、人口増を促す近代産業を引き付ける力が弱いという産業基盤の欠如に求める。

- (17) 島田成矩①「松江城の城郭復元と史料——松江城の城郭図をめぐる——」

(『調査報告書』松江市教育委員会、一九七〇年)、②「松江城城下図」(『調査報告書』松江市教育委員会、一九七一年)、③「松江城の城郭図について——史跡松江城環境整備基礎調査概報——」(『季刊文化財』一三、一九七一年)、④「松江城の城郭について」(『島根県文化財調査報告』一〇、島根県教育委員会、一九七五年)、⑤「松江城城下図と城下町(一)(二)(三)」(『松江工業高等専門学校研究紀要』一一—一三、一九七六—七八年)。

- (18) 島田成矩『松江城物語』(山陰中央新報社、一九八五年。増補版は一九九九年)。その他、一九七〇年代には、桑原公德「山陰の城下町——松江」(藤本利治・矢守一彦編『城と城下町 生きている近世1』淡交社、一九七八年)が発表されているが、とくに新しい点はない。

- (19) 西和夫「松江城天守」(『日本建築史基礎資料集成14 城郭I』中央公論美術出版、一九七八年)。

- (20) 池田善昭「松江平野における居住立地の展開と水問題(一)——治水をめぐる問題と城下町形成——」(『歴史地理学会会報』一〇五、歴史地理学会、一九七九年)。続編が公表されなかった点が惜しまれる。

- (21) 『史跡松江城保存修理事業報告書』(昭和五七年度、昭和五九年度、昭和六〇年度、松江市教育委員会、一九八三・八五・八六年)。

- (22) 松尾寿「松江」(『歴史公論』八一六、一九八二年)。

- (23) 松尾寿『城下町松江を歩く——松江の誕生と町のしくみ』(たたら書房、一九八六年。のち『城下町松江の誕生と町のしくみ』と改題・改訂し、松江市教育委員会から二〇〇八年に再刊された)。

- (24) 松尾寿「島根大学附属図書館所蔵「堀尾時代松江城下図」について」(『島根大学附属図書館報 松風』五四、一九九七年)。

- (25) 和田嘉宥①「足軽屋敷の基本構成とその変遷——松江城下雑賀町の場合——」

- 『日本建築学会中国支部研究報告集』一四、一九八八年)、②「明治初期の構造的特性——城下町松江の研究1——」(『日本建築学会中国支部研究報告集』一五、一九八九年)、③「松江城下武家屋敷明細帳」等の概要——城下町松江の研究2——」(『日本建築学会学術講演梗概集(九州)』一九八九年)、④「18世紀前半における武家屋敷の動向(内山下幌町北地区)——城下町松江の研究3——」(『日本建築学会学術講演梗概集(中国)』一九九〇年)、⑤「町人町末次の構造的特性——城下町松江の研究4——」(『日本建築学会学術講演梗概集(東北)』一九九一年)、⑥「武家屋敷(城東・城西地区)の構成——城下町松江の研究5——」(『日本建築学会中国支部研究報告書』一七、一九九一年)、⑦「町人町白潟の構造的特性——城下町松江の研究6——」(『日本建築学会学術講演梗概集(北陸)』一九九二年)、⑧「出雲地方における城下町及び町場の形成とその変容過程に関する研究」(平成三年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書、研究代表者 和田嘉宥、一九九二年)、⑨「町人町の表通りと裏通り——城下町松江の研究7——」(『日本建築学会中国・九州支部研究報告』九、一九九三年)、⑩「町人町に見られる居宅と借家 天神町の場合——城下町松江の研究8——」(『日本建築学会学術講演梗概集(関東)』一九九三年)、⑪「屋敷方勤之様子申送之覚」と屋敷方——城下町松江の研究9——」(『日本建築学会学術講演梗概集(東海)』一九九四年)、⑫「松江藩御作事所とその作事について——城下町松江の研究10——」(『日本建築学会学術講演梗概集(北海道)』一九九五年)。
- (26) 広島大学附属図書館所蔵「沽券大帳」。
- (27) 注(25)、和田②論文。
- (28) 広島大学附属図書館所蔵「松江城下武家屋敷明細帳」。
- (29) 注(25)、和田③④⑥⑧⑩論文。
- (30) 広島大学附属図書館所蔵「松江市街二分間図」。
- (31) 注(25)、和田⑤⑦⑧⑨⑪論文。
- (32) 『史跡松江城発掘調査報告書(二ノ丸番所跡)』(松江市文化財調査報告書第五六集、松江市教育委員会、一九九三年)、『史跡松江城公園周辺整備事業実施報告書』(松江市、一九九六年)、『石垣調査報告書 史跡松江城』(文化財保存計画協会編、松江市教育委員会、一九九六年)、『史跡松江城整備事業報告書』(第一分冊事業概要、第二分冊調査編、第三分冊石垣修理、第四分冊建造物復元、第五分冊環境整備、松江市教育委員会、二〇〇一年)。
- (33) 『史跡松江城石垣修理報告書』(松江市文化財調査報告書第一一集、松江市教育委員会、二〇〇七年)。一九九三年には、堀恵之助(中原健次)『松江・亀田山千鳥城取立古説』(私家版)が刊行され、江戸時代に記された「亀田山千鳥城取立古説」が翻刻されている。
- (34) 図録『絵図でたどる島根の歴史』(三館合同企画、歴史地理学会島根大会実行委員会図録編集委員会・島根県立博物館編、島根県立博物館、二〇〇四年)。
- (35) 『絵図で見る城下町松江』(松江市教育委員会編・刊、二〇〇四年)。
- (36) 島根大学附属図書館編『絵図の世界——出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図——』ワン・ライン、二〇〇六年)。同書に収載された講演録、林正久「松江平野の地形とその形成過程」は、林氏が一九九一年に発表された「松江周辺の沖積平野の地形発達」(『地理科学』四六一二)をさらに敷衍した内容であり、松江周辺の地形のあり方を地質学的に跡付けたという点で重要である。
- (37) 高安克己「堀尾期松江城下町絵図」の放射性炭素年代」(『山陰中央新報』二〇〇七年一月二三日付、一一面)。

(38) 水田義一「計画図としての城下町絵図」『歴史地理学』五〇—四、二〇〇八年。

(39) 佐々木倫朗『堀尾吉晴と忠氏』(松江市教育委員会、二〇〇八年)。

(40) 山根正明『堀尾吉晴 松江城への道——浜松、富田、松江、城普請の軌跡——』(松江市教育委員会、二〇〇九年)。

(41) 拙稿「築城物語」『山陰中央新報』二〇〇九年九月二日付文化欄。のち乾隆編著『続松江藩の時代』山陰中央新報社、二〇一〇年、に収載。

(42) 拙稿「丘陵だった宇賀山」『山陰中央新報』二〇〇九年九月一日付文化欄。のち『続松江藩の時代』に収載。その他、城地選定時の状況を考察したものに、拙稿「松江開府の立役者「百姓又六」」『山陰中央新報』二〇一〇年八月一日付文化欄。のち『続松江藩の時代』に収載)がある。

(43) 作野広和・堀江智史『松江市白潟地区における空間構造の形成と土地利用の空洞化』(島根大学教育学部共生社会教育講座人文地理学研究室、二〇〇八年)。作野広和「近世絵図のデジタルコンテンツ化と活用技法」(相良英輔先生退職記念論文集刊行会編『たたら製鉄・石見銀山と地域社会——近世近代の中国地方——』清文堂出版、二〇〇八年)。

(44) 『城下町の景観の動態的変容に関する歴史地理学的研究(報告書 絵図集)』(平成一八〜二〇年度科学研究費補助金(若手研究A) 研究成果報告書、研究代表者 船杉力修、二〇〇九年)。

(45) 『松江城下を掘る』(平成一九年特別展図録、松江市鹿島歴史民俗資料館、二〇〇七年)。

(46) 松江歴史館編『雲州松江の歴史をひもとく——松江歴史館展示案内——』(ハベスト出版、二〇一一年)。平成23年冬の企画展図録『江戸時代へ行こう!——松江城下町ものがたり——』(松江歴史館編・刊、二〇一二年)。

(47) 『松江城下町遺跡(殿町二八七番地・殿町二七九番地)』(松江市教育委員会・社団法人松江市教育文化振興事業団、二〇一一年)。

(48) 宮本雅明「城下町の空間類型」『年報都市史研究』二、山川出版社、一九九四年。のち同氏著『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、二〇〇五年に収載) および同氏著『都市空間の近世史研究』序章「近世都市の歴史・空間・景観」。

(49) 宮本雅明「近世主要城下町一覽」および同「公権力の一元化と城下町」、同「城下町を開いた町割」(いずれも『朝日百科日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅』五、城と城下町、朝日新聞社、二〇〇〇年、収載)。

(50) 『城下町金沢学術研究1』第一分冊、日本の城下町と金沢城下町——発展過程と空間類型——(金沢市編・刊、二〇一〇年)。

(51) 高見敏志・永田隆昌・松永達・九十九誠「松江城下町の設計技法(1)——近世城下町の設計原理に関する研究 その20——」(松江城下町の設計技法(2)——近世城下町の設計原理に関する研究 その21——)(以上、『学術講演梗概集 計画系二〇〇二(F-1)』社団法人日本建築学会、二〇〇二年)。高見敏志「松江城下町の縄張」『西日本工業大学紀要』理工学編三三、二〇〇三年)。高見敏志『近世城下町の設計技法——視軸と神秘的な三角形の秘密』(技報堂出版、二〇〇八年)。同『城と城下町——築城術の系譜』(技報堂出版、二〇〇九年)。

(52) 拙著『京極忠高の出雲国・松江』(松江市教育委員会、二〇一〇年)。

(53) 拙稿「京極期松江城下町図と分限帳——諸本の比較検討——」『松江歴史館研究紀要』第一号、二〇一一年三月)。

(54) 拙稿「堀尾期松江城下町絵図」の制作工程と伝来——角筆の使用痕にみる——『日本歴史』第七五五号、二〇一一年四月)。

(55) 仁木宏「中世都市から近世都市へ——城下町・鉢山町——」(『平成22年度石見銀山遺跡関連講座・シンポジウム記録集』島根県教育委員会、二〇一一年)。

(56) 松本博・安高尚毅①「城下町図と山陰商工便覧から見た近世後期の松江の空間——松江城下町の基礎的考察——」(『日本建築学会中国支部研究報告集』三三、二〇一一年三月)、②「松江城下町図の編年——松江城下町の基礎的考察2——」、③「近世松江の成立と空間形成 藩政前期——松江城下町の基礎的考察3——」、④「近世松江における都市空間の展開 藩政後期——松江城下町の基礎的考察4——」(②③④共『日本建築学会中国支部研究報告集』三四、二〇一二年三月に収載)。

(57) 桑原弘氏が一九七八年に刊行した『山陰道商工便覧』の復刻版(だるま同書店発行)の「復刻あとがき」によれば、川崎源太郎は、「経歴は詳らかでないが、明治十六年に同種類の「岡山商売往来・吉備の魁」を出版し、また「備後の魁」「西大寺の魁」等も出している」という。なお細かな点ではあるが、松本・安高①論文では「山陰商工便覧」と表記しているが、正確には「山陰道商工便覧」である。次いでに言えば、副題や本文で使用される「松江城下町」という表現は、松江市教育委員会が発掘した「松江城下町遺跡」の遺跡名であり、誤解を生む表現であるから、「城下町松江」とすべきと考える。

(58) 「近世初期の外堀」の根拠は、いずれも弱い。一つ目の根拠、城下町建設初年度にどこを造成したかは、いまだ物語の域を出ていない(注41、拙稿「築城物語」)。二点目の根拠「ほとんど」の堀幅・深さが記される「寛永年間松江城下家屋敷之図」の「田町川」に記載がないとするが、同図には「田町川」と目される部分に広さ深さが二か所記されている。三点目の「正保年間松

江城下絵図」では田町川で「舟入口」とあり、他の箇所では「堀口」と記載されるから「田町川」が堀ではないとするが、同図に「舟入口」と書いた部分はなく、「田町川」とされる部分に記載される文字は「此入江」とあり、誤読ではないか。また「堀」の表記がないからといって、「堀」か否かは断定できないであろう。四点目として「堀尾期の時代からある米子町の位置」を根拠にあげる。この表現からは、米子川の東側に米子町という町屋があり、「町郭外型」である松江城下では、町は郭外にあるはずである、との判断と読むことができる。「町郭外型」か否かは別に述べるとして、外堀の内側とされる普門院前の町屋をどのように考えるのであろうか。ここで挙げられた四つの根拠は、いずれも史料批判という点で問題があるように思う。

(59) 松本・安高②論文と同じ月に刊行された、松尾寿『城下町松江の誕生と町のしくみ』(松江市教育委員会)の第二刷、四四頁注七八を参照のこと。

(60) 貞享頃(一六八四—一八八)→明治初めまでの武家地の変遷を記し、藩の屋敷方で記録・保存された帳簿「松江城下武家屋敷明細帳」は、花畑の南部分を内中原に分類しているの、内山下は花畑の東の堀までではないだろうか。

(61) 西和夫・山田由香里・中島綾乃・川村摩理「昭和解体修理工事資料に基づく松江城天守の再検討」(『日本建築学会計画系論文集』第七七巻第六七三号、日本建築学会、二〇一二年三月)。

(62) 『松江城研究』第一号(松江市教育委員会、二〇一二年)。

(63) 徳岡隆夫・高安克己・大矢幸雄「絵図と測量図に見る大橋川の歴史」(『松江市史研究』三、二〇一二年三月)。その他、上杉和央・大矢幸雄・石倉舞美「松江藩領全域をおおう「輪切絵図」——安定的な年貢確保を目的に——」(『松江歴史館研究紀要』二、二〇一二年三月)に見るように、城下だけでなく、村方の絵図分析にも関心が向けられるようになってきた。

- (64) 長谷川博史『中世水運と松江』(松江市教育委員会、二〇一三年)。
- (65) 渡辺理恵・大矢幸雄「松江城及城下古図」の特徴とその表現内容(『松江史研究』四、二〇一三年三月)。この論文は、執筆者の大矢氏の御好意で校正段階の原稿を閲覧させていただいた。この論考によって、宍道湖岸の石垣築造の時期は、拙著『京極忠高の出雲国・松江』(六三頁)で一九世紀に入ってからとしていたが、一八世紀初頭まで遡ることが明らかとなった。
- (66) 注(65)、渡辺・大矢論文。
- (67) 注(56)、松本・安高②論文。
- (68) 注(65)、渡辺・大矢論文。
- (69) 「松江城下武家屋敷明細帳」は広島大学附属図書館所蔵で、その写真帳および和田嘉宥氏作成のノートが松江歴史館に保管されている。「松江城下武家屋敷明細帳」は、地区ごとに「イ」「ロ」「ハ」といった記号を付しており、和田氏はこの記号と共に、屋敷地毎に番号を付して所在が判るようにしている。本稿もこれに倣い屋敷地を明示した。
- (70) 注(56)、松本・安高②論文。
- (71) 『島根県の地名』(日本歴史地名大系、平凡社、一九九五年)二二六頁、奥谷村の項。
- (72) 注(65)、渡辺・大矢論文。
- (73) 「籌海図篇」日本国図、一五六二年成立(中国兵書集成第一五冊『籌海図篇』解放軍出版社(北京)、一九九〇年)。
- (74) 明応四年正月八日付松浦道念寄進状(売布神社文書)。永祿九年以前推定一〇月二一日付付毛利氏奉行人連署状(萩藩閩録巻九八)。注(64)、長谷川著書。
- (75) 「雲陽大教録」(出雲市・比布智神社所蔵)。末次・中原・黒田・奥谷は末次

荘に生まれ、菅田は西長田郷に含まれていた(『島根県の地名』平凡社、一九九五年、末次保・末次荘、菅田村の項)。

- (76) 注(55)、仁木論文。
- (77) 以上、注(50)、宮本著書(『城下町金沢学術研究1』)。
- (78) 以上、注(52)、拙著。
- (79) 注(65)、渡辺・大矢論文。
- (80) 上野富太郎・野津静一郎編『松江市誌』(松江市庁刊、一九四一年)。
- (81) 拙稿「没後三〇〇年松平綱近」(『山陰中央新報』二〇〇九年二月二四日付文化欄。のち乾隆明編著『続松江藩の時代』に収載)。
- (82) 拙稿「松江藩主の居所と行動——京極・松平期——」(『松江市史研究』一、松江市教育委員会、二〇一〇年)。
- (83) この記録は『松江市誌』(一五七七頁)に部分引用されるのみで、原史料の確認はできなかった。
- (84) 谷口為次編『和訳出雲私史』(松陽新報社、一九一四年)。
- (85) 『松江市誌』(一九四一年、一四四七・一五二二頁)および同書を根拠とした『島根県の地名』(平凡社、一九九五年)では、寺町にあった普門院は延宝四年(一六七六)に火災にあい、元禄二年(一六八九)に北田町に移ったとする。市誌が何を根拠に叙述しているかは不明であり、今後の普門院所蔵史料の調査が俟たれる。ただ、一八世紀初頭から半ばに成立した「出雲鍼」には、天和年中(一六八一—一八四)に白濁南寺町から北田町へ普門院は移ったとし(『松江市史』史料編5近世I松江市、二〇一一年、収載)、また享保二年(一七一七)成立の「雲陽誌」普門院の項では、元禄年中(一六八八—一七〇四)火災があったと記す。いずれも、「天和年中」、「元禄年中」と正確な年代を記しておらず、同時代に近い史料ではあるが、伝聞の可能性があ

る。

(86) 松尾寿氏は、普門院前の堀開削を、同院が北田町へ移ってきた元禄二年頃ではないかと推定している（同氏著『城下町松江の誕生と町のしくみ』松江市教育委員会、二〇〇八年、八五頁）。

(87) 『松江市史』史料編5近世Ⅰ所収「雲陽大教録」。

(88) 幕末に成立した桃好裕（節山）編纂の『出雲私史』は、天神川の開削を疑問視している。「出雲国勝地考」に載るといふ天神川の開削について、「是より以前、既に此川あるに似る」からであった。しかし、「三谷氏記録」の「切貫」という表現や「雲陽大教録」記述から、本文で記したような天神川の流路を東西へ正したことを「切貫」と表現したと見るのが最も自然であると考える。

(89) 『松江城下町遺跡（殿町二八七番地・殿町二七九番地）』（松江市教育委員会・社団法人松江市教育文化振興事業団、二〇一一年）。松江歴史館編『雲州松江の歴史をひもとく』（ハーベスト出版、二〇一一年）。

（にしじま・たろう 松江歴史館学芸員）

〔追記〕 成稿後、松江市観光振興部観光施設課松江城国宝化推進室編『松江城天守学術調査報告書』（同室刊、二〇一三年一月）の刊行を知ったが、本稿に含めることができなかつたことを追記しておく。

松江歴史館 研究紀要

第3号

◆松江藩研究◆

城下町松江研究の現状と課題	西島 太郎	1
松平齊貴の上洛道中記録に見る旅の姿 ——「御上京一途」を参考として——	小山 祥子	27
松江藩儒黒澤石斎の研究（一）	西島 太郎	37
二人の甫庵 ——小瀬甫庵と山岡甫庵——	福井 将介	50
堀櫟山・市郎父子に関する新知見 ——展覧会開催後の調査より——	西島 太郎	73
資料紹介 安達家文書目録・翻刻（一）	新庄 正典	101
「三谷家住宅」調査報告書	足立 正智	130(31)
高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について ——近世大名墓と堀尾家の宗教的背景——	西尾 克己 稲田 信 木下 誠	160(1)

◆博物館研究◆

松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理 平成24年企画展	大塚 享義	122(39)
「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析	西島 太郎	109

平成25年3月



松江歴史館

MATSUE HISTORY MUSEUM BULLETIN

No. 3 MARCH, 2013

CONTENTS

◆STUDY OF MATSUE CLAN IN THE EDO PERIOD◆

- Current Status and Issues of research MATSUE castle town----- NISHIJIMA Taro ---- 1
- The figure of the trip seen to record the going-up-to-Kyoto trip
of the Matsudaira Naritake—Refer to a "Gojyoukyouitto" -----KOYAMA Sachiko---- 27
- Study of SEKISAI KUROSAWA is a Confucian scholar
of MATSUE clan vol.1 ----- NISHIJIMA Taro---- 37
- A research for "two persons ' Hoan (小瀬甫庵 and 山岡甫庵)" ---- FUKUI Masayuki---- 50
- New knowledge about the father and son
REKIZAN and ICHIRO HORI-----NISHIJIMA Taro---- 73
- Document introduction : A list and reprint of the document
of ADACHI (安達家) vol.1 -----SINSYO Masanori---- 101
- Investigative report of MITANI house-----ADACHI Masanori---- 130 (31)
- Religious background of early modern times -----NISHIO Katsumi---- 160 (1)
- daimyo graves and the Horios
INATA Makoto
KINOSITA Makoto

◆MUSEUM STUDIES◆

- Problems and solutions associated with the construction of Matsue History Museum
-----OTSUKA Takayoshi---- 122 (39)
- Recording and analysis of the exhibition. "Become a photographer grandson.
Son to become a painter of Matsue samurai" on exhibition
----- NISHIJIMA Taro---- 109

Published by
Matsue History Museum
Matsue, Japan

平成二十五年（二〇一三）三月二十九日発行

松江歴史館研究紀要 第三号

編集・発行 松江歴史館

住所 島根県松江市殿町二七九番地

〒六九〇一〇八八七

電話 〇八五二一五五一一六〇七

FAX 〇八五二一三二一一六一一

